シンポジウム 8　企画概要

タイトル	医療と福祉の協働が起こす小児在宅医療のパラダイム転換－病院・病気から地域・生活へ

概要
現在、我が国が直面しようとしている未曽有の超高齢化社会において、医療システムが死亡者の増加に耐えきれないことが懸念されている。それは、病院に医療資源を集中させてきたことが、大きな要因になっている。同時に、病院への医療資源の集中は、小児医療にも大きな問題を引き起こしている。小児医療における技術の急速な進歩と医療者の懸命な努力によって、我が国は、世界でも類を見ない子どもの死なない国になった。国民の年間死亡者数が 120 万人を超す現在、19 歳以下の小児の年間死亡者数は、約 5800 人であり、死亡原因で最も多いのが事故であることを考えると、病気で亡くなる子どもは更に少ない。米国の 19 歳以下の年間死亡者数は 5 万人と言われているので、我が国の小児医療が実現した成果の大きさが理解できる。しかし、一方で、救命と治療に集中してきた小児医療は、予想しなかった問題に直面している。それは、医療機器、医療ケアに依存して生存する子どもたちの急激な増加であり、それを既存の病院中心の医療システムが受けとめきれなくなってきたことである。今、日常的に医療ケアを必要とする子どもたちが、地域に急激に増加しているが、医療資源の病院から地域への移行は遅れており、地域における小児在宅医療のための社会資源は、ほとんど整備されていない。そのような資源の乏しい地域社会に医療ケアが必要な子どもたちが、急速に増えているが、このような子ども達の正確な数や分布など、行政も小児科学会も把握できていない。今、小児在宅医療の社会資源の整備は焦眉の急である。そして、そのためのキーワードが、「福祉と医療の協働」である。これは、成人の在宅医療でも重要とされているが、小児在宅医療においても重要性は極めて高い。が、介護保険という福祉と医療をつなぐ枠組みが小児にはないので、成人より福祉と医療の協働は難しい。しかし、医療と福祉が協働し、医療ケアが必要な子ども達に、より豊かで、楽しい生活を、地域、家庭で送れるようにすることが大きな課題である。その課題にそれぞれの立場から懸命に取り組んでいる、4 人の方に講演していただき、これまで病院と病気を中心としてのみ構成されてきた小児医療のあり方を変え、地域と生活を中心とした新しい小児医療の枠組み、パラダイムをつくっていくための道筋を探りたい。